

2012年9月14日 発行

だれでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

2012年8月例会 報告

(8月10日 参加者6名)

「羅生門(童話)」(筆名 村井章一) を読む

初出 「赤い鳥」1931(昭和6)年12月号

「かささぎ物語」と同じ号に掲載

芥川龍之介の「羅生門」とは違うの？

芥川龍之介の「羅生門」の素材となった説話

「今昔物語集」巻第二十九

羅城門の上の層こしに登りて死人を見たる盗人の語こと第十八

「今昔物語集」巻第三十一

大刀帯たてはきの陣に魚を売る媪の語こと第三十一

森三郎の「羅生門(童話)」の素材となった説話

「今昔物語集」巻第二十四

玄象こといふ琵琶鬼のために取らるる語こと第二十四

村上天皇の御世、名器玄象が鬼に盗み取られたが、夜半、源博雅が弾音をたどって羅城門に至り、楼上の鬼から玄象を返してもらってきた話。



源博雅つていえば夢枕獏の「陰陽師」に登場する管弦の名手

森三郎の「羅生門(童話)」の中で、最後に兄のかしこ丸が弾く琵琶の秘曲「流泉啄木」は、源博雅が蟬丸法師から口伝で習った曲。「今昔物語集」巻第二十四の第二十三

紙上座談会 (抄)

司会 森三郎さんは「今昔物語集」の話を素材として、主人公を源博雅から、「かしこ丸・かしひ丸」兄弟に変えているんですね。

T 「兄弟」の話は森三郎さんの作品の中で重要なモチーフですね。

司会 次回の作品も「赤穴宗右衛門兄弟」という「兄弟」の話です。

U 昨年紙芝居になった「目ぐすり」も歌が重要な役割をしていますが、この「羅生門」でも音楽が心を開くきっかけになっていますね。

司会 源博雅には盗人を笛で改心させたという話があるんですよ。「古今著聞集」の巻第十二「偷盗第十九、四十九」「羅生門」の中で、兄のかしこ丸の笛の音に感銘して、楼上にいた泥棒が過去の罪を懺悔し、それが実は捜していた弟のかしひ丸だとわかるという展開は、まさにこの「古今著聞集」の流れですね。

Y 森三郎さんは日記か何かに読書記録を付けていなかったんでしょうかね。

司会 日記は付けていないと聞いています。でも森銃三さんが「日本古書通信」のなかで、明治四十二年の「柳田国男翁の推薦図書」で「今昔物語」を挙げていることを紹介しています。昭和六年当時なら、作家として、三郎さんも「今昔物語集」を読んでいたことは想像できます。

K この作品の中で兄弟のやりとりの部分は余分な心理描写なしで、いろいろなものをそぎ落として会話だけで進めているところなど、かえって斬新に思えます。

M 同感です。会話体から二人の掛け合いの迫力を感じます。